

第6章 提言とまとめ

第4章と第5章を通じて、足立区と上田市での実践について詳細に述べてきた。どちらの講座=研修プログラムも、その根幹にあった考え方は、地域日本語教室を外国人と日本人双方の居場所として捉えるところにある。その居場所は、日本語学習の場、異文化（国際）理解の場、交流そして地域参加の場としての機能を有し、異なる背景を持つ者同士が自由に自然にコミュニケーション活動に参加でき、人間関係づくりに最大限に活かされることを目指したのである。それを実現するための人づくりであり組織づくりであったのである。

今後の地域日本語活動の研修プログラムの企画・運営に当たっては、以下の基本構成を踏まえながら、共生の地域づくりを基本理念とし参加型学習の手法を取り入れたプログラムの活用方法について、さまざまな地域の方々と寄り添いながら、協働実践活動として追究していきたい。

基本構成：8回から10回の講座で、1回の講座が2時間半～3時間

- (1) 該当地域の支援活動の実態に関する講座（1回）
- (2) 「多文化共生社会と地域日本語教育」「地域日本語教育の意義と役割」など、全体の導入となる講座（1回）
- (3) 「参加型学習」を活用した実際の活動に関する講座（3回～5回）
→ 日本語の文法&参加型学習の手法
- (4) 日本語教授法としての参加型学習（振り返りの時間）（1回）
- (5) 地域の日本語活動の実践に向けて（1回～2回）
→ 講座のまとめ&次なる活動へのつながりの時間

この2つの地域でのプログラムづくりにおいて特に注意した点は、受講者の大半が持っている「教師像」を状況に応じてずらすことや、「日本語の習得」の在り方についてのビリーフ（信念）についての問い直しを図ることなどであった。

さらに、参加型学習の手法（部屋の四隅、フォトランゲージ、2頭のロバ、いとこさがしなど）の紹介・実践を通して、「教室内学習の伝統的なモデル=教師主導型=競争・勝敗」という考え方からの解放・脱皮を促し、言語教育の場における協同学習の重要性について気づくような流れをつくるように心掛けたことである。

こうした工夫や努力が実った成果として、「行政が日本語教室を先導するので

はなく、受講者に寄り添う形で対等な立場で意見を出し合い一緒に活動の形をつくっていく姿勢をとったことが、ボランティアの主体性を引き出し、主体的な活動へとつなげていくことができたと思われる。」(上田市の担当者所感)という状況にまで持っていくことができたのであった。

1980年代後半以降の日本における急速な国際化の中で、各地域には定住化する外国人が増加した。それに伴って、市民ボランティアによる日本語学習支援の活動が活発に行われるようになった。これらの日本語ボランティアの活動は、大学や日本語学校のような教育機関とは違い、地域に暮らす日本人と外国人が同じ市民という立場で、しかも日常のかつ継続的に接触交流する場になっている。このような地域活動は地域参加への入り口として重要な役割を果たしているのではないだろうか。であるとすれば、そこに集まる日本語ボランティアは、今後の日本社会の「多文化共生」の有り様を左右するほどの大きな存在といえる。また、異なる言語や文化を持つ外国人にとっても日本人をそして他国の人々を理解し、多様性を享受できる貴重な場となるはずである。つまり、日本における多文化共生社会の構築の場は、地域日本語教室の現場にあると言っても過言ではないだろう。

人間は、基本的には1人では生きていけない。人間は基本的には協同的で相互依存的な存在である。そして、外国での言語学習は、やはり学習動機にかかっている。仕事や生活上の必要性が学習意欲につながっている。それとともに、共に暮らす人々との関係性の中で、信頼が生まれ、異文化理解や他者理解への欲求が生じ、言語の学びへとつながっていく。このように考えたとき、地域日本語教室の活動やその役割を、日本語を教えるところと限定するのではあまりにももったいない。本編で述べるところの5つの機能＝「居場所」「交流」「地域参加」「国際理解」「日本語学習」を有機的に機能させる仕組みづくりが求められる。そのためには、ボランティア養成講座の研修プログラムに、活動の新たな視点や発想を盛り込む必要がある。言葉の習得を第一義とする従来型の日本語教育の枠を超えて、コミュニケーション活動が個人の成長や人間理解に大きな役割を果たすことを謳い、地域日本語教室の空間が新たな人間関係を創造し、現代社会において大きな役割を担っていることを何らかの形で伝えていく必要がある。野山班の2年間の活動は、そのためのプログラムづくりを目指した協働実践研究だったのである。本編での調査報告と論考が、日本社会の変化に対応した新たなアプローチの提言として意味を持つのであることを願いたい。